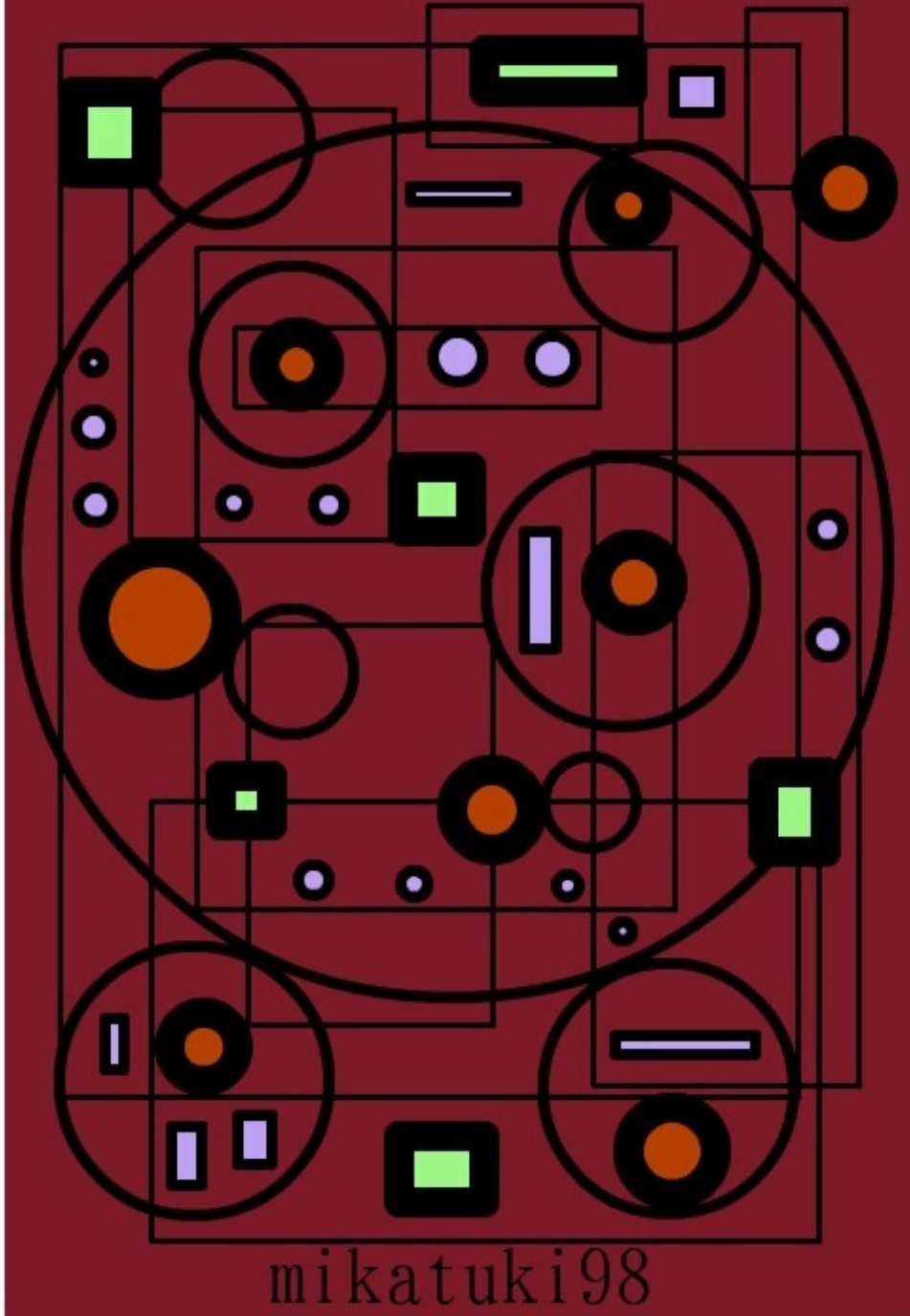


# ころがり坂



半月村で一番坂が急だと言われている〈ころがり坂〉を、大量のサツマイモの塊がじわりじわりと動いているのが遠め目に見えます。

「ははあ〜ん。ありゃ、マンドリツキの奴だな」

ピンと来たオナガツキーは、ちょっくらマンドリツキをからかってやろうと思い、〈ころがり坂〉に沿って植わっている〈曲がり杉〉の枝から枝へと身軽く跳んで、サツマイモの塊のほんの直ぐ後まで追いつきました。

オナガツキーは〈曲がり杉〉の枝からひょいと〈ころがり坂〉の地面に降りると、マンドリツキに気付かれないようにそっとサツマイモの塊の手前、2メートルの位置で仁王立ちになりました。

「おい！ えっちらおっちらとまあ、大量のサツマイモを担いでご苦労さんなこったな」

背中に担いでいるサツマイモの重みのせいで前屈みになっているマンドリツキには、声は聞こえましたが誰が言っているのかよく分かりません。

「誰だ！ お前」

とりあえず声は掛けたものの、担いでいるサツマイモを降ろさない限りは、容易に顔を上げて声の主を確かめることは出来ません。マンドリツキはそのままえっちらおっちらと転がり坂を上り続けました。

ところが、マンドリツキとの距離が徐々に縮まっていることに気付かない間抜けなオナガツキーは、相変わらず同じ場所に立ちはだかだったままマンドリツキをからかっています。そして遂にマンドリツキはオナガツキーにドーンとぶつかってしまい、その弾みで、なんと！ オナガツキーの身軽い身体は更に2メートル先に吹き飛ばされてしまいました。吹き飛んで行った先には小さな水溜りのようなものがあり、オナガツキーが落ちた時、ネチッという音をたてました。そう、水のようなポチャッという音ではなく、ネチッという音です。

よく見ると、オナガツキーが落ちた水溜りのようなものはネバネバしていて、それは〈鳥餅（とりもち）の木〉という半月村特有の木に実る果汁でした。鳥餅の木の実は、接着剤として高く売れるというので、半月村の村民がよくこの〈ころがり坂〉を通して、隣の三日月村と満月村に売りに行くのです。多分、誰かがその時うっかり果汁をこぼしてしまっていたのでしょう。

オナガツキーはネバネバした果汁の中に勢い良く落ちた弾みで、自慢の長い尻尾が背中にくっついてしまい、尾無し猿になってしまいました。

「がはははは！ オナガツキーお前だったのか。オレ様にちょっかい出そうとするから、そんな目に遭うんだ！ 自慢の尻尾が無くなりゃ〜枝から枝へと、もう跳んで回れねえな。ふっ」

さっきのお返しとばかりに地面に転がっているオナガツキーに向って、マンドリツキは皮肉たっぷりの台詞を浴びせ掛けました。そしてネバネバを避けるように、じわりじわりと相変わらずサツマイモを背中に担いだまま、オナガツキーの側を通り抜けました。

ところが暫くして、何やら背中でもぞもぞと動いている気配です。そのもぞもぞがマンドリツキの背中に微かに伝わって来ます。どうも気になって仕方の無いマンドリツキは、背負っていた大量のサツマイモの塊をヨッコラショッと地面に降ろして調べることにしました。

「中に何か居るのかあ？」

マンドリツキが、サツマイモの塊に顔を近づけたその時です。もぞもぞと中から出て来たのは、なんと！ 猿族の天敵とも言えるニョロニョロした蛇でした。

「ウギャー——！」

がっちりした体格で力持ちのマンドリツキも、さすがに蛇だけは苦手と見えて、その場に尻餅をついてひっくり返り、その弾みでマンドリツキの足がサツマイモの塊をおもいっきりけたくってしまいました。

「うはっ、しまった！ サツマイモが……」

マンドリツキがけたくったサツマイモの塊は一変にバラバラになり、〈ころがり坂〉を次々と転がり始めました。転がり出した大量のサツマイモは、未だ地面にへたばっていたオナガツキもろとも巻き添えにしながら、坂の一番下まであっという間に落ちて行ってしまいました。

「なんてこったい！」

せっかくココまで苦勞して重たいサツマイモを運んだのに、全て水の泡です。マンドリツキはガックリと項垂れると、その場にしゃがみ込んでしまいました。そしてそれまでの疲れがドッと出たのか、そのままコックリコックリと船を漕いで寝込んでしまいました。

マンドリツキはどれくらいの時間、寝込んでいたのでしょうか？ 何やら変な音で目が覚めました。

「ギコギコギコ」

マンドリツキの耳にはそう聞こえます。

「ん？ 一体何の音だ？」

不思議に思ったマンドリツキが辺りをキョロキョロ見回すと、そこには沢山の小猿が居ました。

「ひー・ふー・みー・よー・いつ・むゆ……なな。七匹の小猿か」

見ると小猿たちが木をギコギコ伐って何やら作っています。

「おい！ お前たち、一体何を作っているんだ？」

マンドリツキが小猿たちに尋ねると、少し顔が桃色がかったリーダーのような小猿がピシッとマンドリツキに敬礼するような姿勢で応えました。

「はい！ わたしたちはマンドリツキさんの為に〈荷押し車〉を製作中であります！」

「荷押し車？」

「はい！ マンドリツキさんがきついくろがり坂〉でも楽にサツマイモを運べるように工夫した特製品であります！」

「ほほう。それは助かるな。して、お前たちは一体何処の小猿だ？ この村では見掛けないようだが……」

「はい！ わたしたちは去る昔から……」

小猿が昔語りを始めようとしたその時、チリンチリンと何かが鳴る音がマンドリツキの左の耳元に聞こえて来ました。と次の瞬間、マンドリツキの目の前には、サツマイモが山積になった〈荷押し車〉がありました。

はっ！ としたマンドリツキは慌てて立ち上がり、再び辺りをキョロキョロと見回しましたが、今し方言言葉を交わしていた小猿が居ません。それどころか、他の六匹の小猿たちも何処にも見当たりません。ふと、周りの景色は既に夕暮れ時になっていて、〈ころがり坂〉も茜色に染まっていることに気が付きました。

「嗚呼、オレ様は夢でも見ていたのか？ じゃあ、この〈荷押し車〉は……」

目の前の〈荷押し車〉は、急な〈ころがり坂〉でもマンドリツキの支え無しに転がらないでちゃんと止まっています。不思議に思ったマンドリツキが〈荷押し車〉を手で押してみると、沢山のサツマイモが積まれてあるのに軽く動きます。

「へえ～ こいつはいいや」

マンドリツキは満足げに荷押し車を押すと、どんどんと〈ころがり坂〉を上って行きました。そして坂の一番天辺に来たとき、オナガツキーがコロんと玉のようになって地面に転がっているのが目に入りました。

「お——い！ マンドリツキー——！ 頼むからオレの尻尾を背中から剥がしてくれえ～～」

「おい、お前！ まだそんな格好で居たのか？ それよか、坂の一番下まで転がり落ちたんじゃ

なかったのか？ サツマイモと一緒によお～……て、そういやあ～サツマイモはこの＜荷押し車＞にちゃんと積まれてあるよな？ ……何がなんだかオレ様にはさっぱり分からんな」

「お——い！ マンドリツキー——！ 何でもいいから早くオレの尻尾を背中から剥がしてくれえ～～～」

「仕方ねえなあ～ ちょっと待ってろ！」

マンドリツキはサツマイモを＜荷押し車＞から一つ手に取ると、近くにあった石で細かく砕き、その汁をオナガツキーの背中にくっ付いている尻尾と背中の中に塗りこんであげました。するとカチカチに固まっていた鳥餅の木の実の果汁がサラサラになり、丸まった背中にくっ付いていた尻尾がスルッと外れました。

「ひゃほお——い！ やっと動けるぜ！ あんがとよ」

やっと開放された嬉しさで意気揚々のオナガツキーは、マンドリツキへのお礼もそこそこに、さっさと何処かへ去ってしまいました。

「ふん。現金な奴だな」

オナガツキーが去ってしまった後、マンドリツキは＜ころがり坂＞の天辺に祀られてある「申神社（さるじんじゃ）」に、いつものようにサツマイモを七つお供えしてお参りをすると、今にも日が暮れそうなくころがり坂＞を、今度はサツマイモを山ほど積んだ＜荷押し車＞と共に下り始めました。目的地は隣の三日月村と満月村へです。蛇とオナガツキーのせいですっかり遅くなってしまったマンドリツキは、少し急がねばなりません＜荷押し車＞のお陰で時間は短縮できそうです。

「半月村に戻って来れるのは、こりゃあ～明日の昼になりそうだな……」

半月村の東の空には、マンドリツキを見守るように一番星が光っていました。

了